

市民による創造をめざして —21世紀の課題解決に努力を—

東日本国際大学経済情報学部准教授 山田 紀浩

仮に世にある学問を非常に大雑把に2つに分けようとしよう。すると理系と文系という分け方ができようが、理系とは自然科学の領域で扱い、文系は社会科学の領域で扱っている。そして自然科学の領域では真理追求のために世界中の学者が日夜凌ぎを削り、一つの答えを導き出そうと切磋琢磨している。つまり自然科学の領域では、世界中の学者が共通の概念を持ち研究に没頭している。

しかし社会科学ではどうだろうか。社会科学での研究対象はまさに私たちが日々生活しているこの社会である。もちろん鎌田山の研究室から一望できるいわきという街、そしてその社会も含まれる。今ここからいわきの街をしばしばと眺めてみると、夏井川をはさんで都市が形成され背後には山が望めるという非常に美しい街である。ところでこの山や川というものは、雨が降り風が吹き長い年月をかけて自然が形成してきたものである。しかしビルや道路は雨や風が作り上げてきたものではない。人間が作り上げてきたものである。つまり都市そして社会は人間が形成させてきたものなのである。またこの人間が作り上げてきた社会というものは、世界の国々あるいは地域によって様々な様相を呈しているが、政治体制や歴史、宗教、文化、慣習あるいは気候などによってもそれぞれ異なった形を生み出している。そのために社会科学の領域での研究対象である社会に対する答えは、自然科学でのようになかなか一つには成りえない。そこがまた社会科学のおもしろさでもあるが、しかしノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士が、学問は世のため人のためにならねばならぬとおっしゃったように、社会科学も究極的にはこの社会を作り上げた人間の幸福を追求すべきものだと思はなくてはならない。ところが、都市社会は人間の文明歴史と叡智の結晶であり、現代社会の人間にとっても生活に不可欠な機能を有している。ところがいかに精錬させた設備や機能を有した社会であっても、もしそこ

に人間がいなければどうであろうか。もはやそれらの設備や機能は何の意味も持たないただのガラク
タも同然となってしまう。つまりこの社会は人間が存在して初めて成り立っているのである。そう、
社会には様々な人間がいるが私も含めそれらの人間が本来この社会での中心人物なのである。しかし
20 世紀においてはその人間のための社会づくりというものがなかなか実行されてこなかった。そして
また自分たちの社会や街を自分たちで作ろうと自覚と責任を持ち行動する人間を育成することもで
きずに来てしまったようである。21 世紀においては、何でも行政に任せれば良いという受動的な人間
ではなく、積極的に自分が生活している社会や街に対して関わっていく主体的な人間が必要である。
こうした主体的な人間を社会科学では“市民”と呼び市町村に住民票を持っているという概念での
“住民”とは区別しているが、21 世紀でのこの市民の育成というものが一番肝心な課題であるようだ。

ある街に遊びに行ったとしよう。その街で受ける明るいイメージ、暗いイメージあるいは楽しい
イメージというものは、その街に住んでいる人間から感じ取ることが多い。太陽はどの街にも同じよ
うに照っている。街のイメージはその街に住んでいる人間がいきいきと生活しているか、あるいは暗
く沈んでいるかで変わってしまうものである。

そこで私たちが街あるいは社会へ積極的に関わり、それらを活性化させていく足がかりとして、
まず市民サークルへの参加を勧める。何も難しいことではなく、好きなことを仲間と一緒にしそのた
めに街に繰り出すということである。そして一人一人が楽しいと感じることである。こうした市民サ
ークルや愛好会が数多く誕生し活発な活動を展開していくならば、自分たちの街に対して“行政によ
る開発”ばかりでなく、“市民による創造”も歩調を合わせていくようになるはずである。

私もいわき市内のある市民サークルで活動しているが、こうした数多くのサークル等を活性化さ
せ 21 世紀の課題解決に向けて、いわき市からも社会の中心人物である“市民”の育成に努めていき
たいと考える。